
吸血狩り～V a m p i r e s H u n t i n g～

白山菊理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血狩り～Vampires Hunting～

【ISBN】

N9808C

【作者名】

白山菊理

【あらすじ】

これは吸血鬼と人間に生まれた少女の物語。彼女には様々な災難が降りかかる。

序章 ~Poison・Tragedy~ (前書き)

宿命と言つべきなのか

運命と言つべきなのか

私は同族を……

狩らなくてはいけない

序章 S p o i s o n • T r a g e d y

Rose•Spirit=Thornton……主人公、人間と吸血鬼の
混血の少女

Coffin……スピリット=ソーン家の若き執事

Liumu=Saramant……魔女、カルムの双子の妹

Karumu=Saramant……魔女、リウムの双子の姉

Lidell=Crow……メイド、孤児

Rure……メイド

Chaos……ローズの事を良く思わない吸血鬼

3年に一度、歳を取り約300年生きる吸血鬼たち。

人間が彼らを嫌うように、彼らもまた人間を嫌う。

この物語は、人間と吸血鬼との間に生まれた少女の物語。

ねえ、私は人間？それとも…

雷鳴の轟く中、‘食事の間’と称されたその部屋は、何時にもまして静かで、金属と陶器のぶつかる音だけが響いていた。

この部屋には2人しか居ない。

皺の多い、人間で言えば70歳くらいの老紳士と、17歳くらいの黒髪の少女である。

カシャン！…カラ…カラ…

突然、老紳士の手から持っていたナイフとフォークが床に滑り落ちた。

彼は喉を押さえ低い呻き声を漏らしながら床に倒れた。

「おじこさま…」「一フイン、ルア、手当てを…」

少女の声を聞きつけ、部屋に「一フイン」と呼ばれた執事とルアと呼ばれたメイドが入ってきた。

「お嬢様、一体何が…エドワード様…！」

「毒が、盛られているわ…。」

メイドが不気味に呟いた。

第一章～Funtoon Moon・ルート～（一）

今日もあるの時と同じ様に雷鳴が轟き、激しく音を立てて降っている雨が地面を叩きつけている。

今日は予定では満月になるはずだったのだが……。

吸血鬼と呼ばれる者達は月に一度、満月の晩に長の家に集まり集会を開く。

主に入数の確認や、新しく誕生した吸血鬼の顔見せをするのだが今日は違っていた。

「LJの中で、秘密を隠している者は居ませんか？」

「その前に一つお尋ねしたい。何故、貴女がこの集会を仕切っているのですか？混血のローズ嬢？」

普段ならこの集会をまとめるのはローズの祖父であるHドワードの役目だ。

しかし、彼は今動ける状態ではない。

あの日の毒のせいでの体を動かすことが出来ないのだ。

「カオス卿、その疑問はもともとですが……祖父は今、体を動かせる状態ではないのです。」

「と、おっしゃこますと？」

「何者かに毒を盛り入れ体を動かせないのです。」

集会に集まつた者たちが皆、響動めぐ。
長の存在はそれほど重要なのだ。

それはもちろんローズ自身にとつても。

「ほう？それで混血の貴女が集会を仕切り、犯人を捜そうといふ訳ですね？」

「……。」

「では、こんな集会は無用です。どうか皆様方、お引取りを。」

その場に居た吸血鬼達が一斉に席を立つ。

「そんな！長が何者かに盛られた毒に侵され倒れたのですよ！？」

「その言い分はもつともですけどね、お互いを疑う事は裏切りに近い行為なのですよ。せめて混血でも吸血鬼らしい振舞いや考えを身に付けたらいかがです？それで長の跡を継ぐなど悪い冗談にしか聞こえませんよ、ローズ嬢。」

「分かつています。でも

「失礼します。」

結局、集会は5分ともたなかつた。集会を開いた大広間にはローズと、黒いフードを被つた者だけが残された。

「気にする事ないわ、ローズ。あんな人の言つことなんて。」

「リウム……。」

黒いフードを外し、リウムは微笑んだ。

彼女の年齢は人間で言うと20代前半と言つたところだらうか。髪は銀色でエメラルドグリーンの瞳を持ち、神秘的な雰囲気を放つていた。

そんなリウムを見詰め、ローズは溜息をついた。

「私は、混血だから。」

「ローズ！」

ローズは人間と吸血鬼の“混血”である。そして長の地位を継ぐ、正当な継承者だ。

しかし、吸血鬼の大半は人間を嫌っている。

吸血鬼から見れば人間は自分達の飢えを満たす“食糧”でしかない。ただされだけの存在なのだ。

そのために自分の血筋に“食糧”である人間が入ることを忌み嫌う。もちろん全ての吸血鬼がその様な考えを持つている訳ではないのだが

「ローズ、自分を責めてはいけないわ。私だって混血よ。」「

「でも貴女は魔女との混血じゃない！…」

リウムは魔女と人間の混血である。

人間との混血とは違い、魔術的な面で優れている為に人間や、その混血のように純粹な吸血鬼から嫌われる事は無い。

そもそも魔女と言つものは単独で行動するため、家のある場所を知られているものは少なく、また普段の生活も謎に包まれている。つまり、集会の日以外は外部との接觸はゼロに等しいのである。同じ混血であつても周りの態度が全く違うリウムに対し、ローズは

苛立ちを隠せない様子だった。紅い瞳は潤み、唇は震えている。

「リウム、貴女は吸血鬼の中で生きていけなくとも魔女として生きていい。でも私は、吸血鬼の中にも人間の中にも居場所が無いの！」

「魔女だつて元を連れれば人間よ？ 第一 」

「失礼します。」

扉が開き、ティーカップを持ったメイドが入ってきた。
ティーカップを2人の目の前に置く。

「第一、力オス卿の一言で悩むなんて馬鹿馬鹿しいわよ？ そう思わない？」

「『めんなさい、それもそうね。』

2人共、置いてあるティーカップに手を伸ばす。

「ローズティーなのね。美味しそうだわ。」

リウムの一言にメイドは軽く頭を下げた。

そして、ローズがティーカップに口をつけようとしたその時だった
カシャーン！！！

リウムがティーカップを床に落とした。

「あら。ルア、すぐに代わりのお茶を持ってきて頂戴。」

「ローズ、その必要は無いわ。そりでよ、お嬢さん？」

リウムは微笑を絶やさずメイドの方を向いた。

「魔女の田は全てを見通すわ。カップの中に入っている毒に気付かないとしても思つたのかしら？」

「ルアーーまさか貴女が！？」

「それはこの子を捕えて尋問すれば良い事だわ。誰の差金か大体見当は付いてるけどね。」

ルアは悔しそうに唇を咬んだ。

「貴女さえ、貴女達さえ居なければ！」

「お喋りは後ににして頂戴。」

そう言つとリウムは手で大きく十字を切つた。そのまま十字は銀色に輝く光となつてルアに迫る。

吸血鬼は十字架に弱い。

それを逆手に取つた魔法がこの“十字の束縛”である。

この魔法は純粋な吸血鬼にのみ効く魔法である。

当然ルアにも効くはずなのだが

パンッ！！

当たつたはずの十字は何故か消滅し、光の粒となってしまった。

「どうして、『十字の束縛^{クロス・リストライン}』が効かないの？当たつたはずなのに。」

リウムの横に居たローズが呟く。
確かに当たつたはずなのが……。

リウムはルアのしていたネックレスの宝石に気付き、驚愕の表情を浮かべた。

「何故、何故貴女が『禁断の果実^{プロウディファン・ベリー}』を持つているの？それは……」

「お喋りは後ににしてと言つたわよね？」

ルアは不敵に微笑み、驚くべき跳躍力で2人の頭上を飛び越え、窓を割り、逃走した。

そしてそのまま、森の暗闇の中へ消えていった。

「お嬢様、何事ですか！？」

窓の割れた音を聞きつけ、執事のコーフィンが部屋に飛び込んできた。

ローズは皿に涙を浮かべながらコーフィンに事情を説明した。

「お嬢様、すいません。私が気付かなかつたばかりに。」

コーフィンは申し訳無さそうに深々と頭を下げた。

その横でリウムは割れた硝子をじつと見詰め、目を細めた。

「ねえ、ローズ。色々と話したい事があるの。場所を変えてもいい
かしら？」

「分かつたわ。コーフィン、私の部屋に紅茶を。」

「承りました」

3人は広間を後にした。

広間には何時もの静寂が戻り、冷たい空気を漂わせていた。

第一章～Full moon・Lament～（HH）

暗い森の中、ルアは駆け足で北の方角へ進んでいった。

その姿を時々雷光が映し出す。

雨で泥濘ぬかるんだ土を踏みしめ、息を切らせ、ずぶ濡れになりながらも、ルアは懸命に走り続けた。

ふと

その足が止まつた。目の前に黒い大きな馬車が止まっていたからだ。

ギイイイイ……

不気味な音を立て馬車の扉が開き、中から傘を差した人が出てきた。

「『」苦労だつたわね。』

声は若い女のものだ。

その声を聞いてルアはほつとしたように表情を緩め、軽く会釈をした。

「いいえ、とんでもございませんわ。此方こちらこそわざわざ迎えに来て
いただけなんて申し訳ないくらいですわ。』

「さあ、寒いし濡れるわ。早く中に入りなさい。』

女はルアに歩み寄つた。

と、同時に雷鳴が轟き辺りが明るくなり、ルアの前に立つ女の姿を雷光が一瞬だけ映し出した。

女の長い髪はリウムと同じ銀髪だつた……。

*

リウムの通された部屋、其処はローズの部屋だつた。

天蓋付きのベット、クローゼット、本棚、小さな机と椅子。
1人で過ごすには一度良い部屋だ。

ふと、机の上を見ると写真ほどのサイズの人物画が額に入れて置いてあつた。

幸せそうに微笑む幼いローズ、その両脇にはローズを挟るようにして両親が立つていて。

その絵の忠実さといつたら、今にも動き出しそうなほどだ。
リウムはその絵をじっと見詰めていた。

「その絵はね、コーフィンが描いたものなの。」

リウムの視線に気付いたのかローズはその絵を見ながらそう言つた
が、その顔は何処か悲しそうだつた。

リウムはローズが幼かつた頃を思い出した。

あの頃のローズはいつも無邪気に笑つていた。

憂いも、悲しみも、怒りも知らず、好奇心、喜び、満足感といった感情に満たされてた日々……それは彼女にとつてどんなに充実した日々だったであろうか。

しかし、ローズの心からの笑顔を見ることは今はもう出来ない。
両親が亡くなつたあの日からローズは変わってしまった。

あの日以来、彼女は一度も笑うことは無く、常に思いつめた表情を

している。

たとう笑顔を見せたとしてもそれは本当の笑顔ではないだろう。
今やもう彼女の気持ちには絶望、諦め、後悔といったものしかない
のだから。

キイイイ
…

ドアの開く音でリウムは我に返った。

「紅茶をお持ちいたしました。」

部屋にコーヒーフィンが入ってきた。
彼は机の上に紅茶を置き、部屋から出ていった。

「ところで何なの？ 話つて。」

「“次元の森”の異変についてよ。」

そう言つてリウムはポケットから小瓶を取り出し、机の上に置いた。
中には銀色の粉が入っている。

「これは…？」

「“解毒剤”よ。でも…」

リウムはそう言つて俯いた。

次の言つてローズをまた絶望という奈落に突き落とすかもしれない、
という考えが頭を過ぎつたからである。
しかし、言つしかなかつた。

「でもその薬、効かないかもしれないわ。」

「どういう事?」

「スピリット卿、貴女のお祖父様に使われた毒はね……」

リウムはローズの顔色を伺いながら話を続けた。

「“赤の蠍草”という毒草なの。強力な毒草だから、その解毒剤では気休め程度にしか……」

「そ、そんな……」

ローズはリウムの肩を掴み激しく揺すった。

「もつと他に!他に強力な薬は無いの?ねえ?ねえってば!…

「あるわよ。でも今はもう無いの……。」

コン、コン

「失礼します」

1人のメイドがドアを開けて入ってきた。

リウムはローズを背に庇いながら構えた。何故ならこのメイドには気配というものが一切無かつたからだ。

「夕食をお持ちしました。お久しぶりです。リウム先生。」

次の瞬間、リウムは両手の指の間に8本のナイフを出現させ、メイ

ドが夕食を机の上に置くのと同時にそれを投げつけた。

カツカツカツカツ

ナイフが順に壁に刺さっていく。

メイドは向つて来るナイフを空中で身をひねりながらかわし、リウムの目の前に迫った。

リウムは残り一本となつたナイフをもう一度メイドに向つて投げた。メイドがそれを手で弾くと一枚のカードとなつて床に落ちた。他の7本のナイフも、だ。

「お久しぶりね、リデル・クロウ。」

メイド…リデルに向つてリウムは微笑んだ。

「知り合い…だつたの？」

ローズは目を丸くした。

今日の前で起こつたことを、直ぐに受け入れられるほどローズは器用ではない。

「ええ、私の生徒であり後輩よ。腕が鈍つてないよう安心したわ。

」

「ごめんね、ローズ。お騒がせしちゃって。」

大して悪びれた様子も無くリデルはローズに一応謝つた。

「ねえ、ローズ。リデルが来た日のこと覚えてる?」

「ええ、引き取り手の無い孤児としてでしたっけ？」

「実は、私が連れてきたのよ。」

今から36年前

2月14日、人間で言えばローズの5歳の誕生日の日に両親が死んだ。

死に方は最悪だった。
毒を飲ませた後、ナイフで数箇所を刺し、母は首を落とされ、父は胸に杭を打たれていた。

幼かつたローズは父と母が殺される現場に立ち会ってしまったのだ。
しかし、ローズはその時のことを見えていない。ショックでその時の記憶をなくしてしまったのだ。

唯一覚えているのは床一面に広がる赤い血と、その中で母の首が此方を向き田から涙を流していたという事だけ……。

その後、ローズは誰とも口を口を利かなくなつた。
水も、ご飯も喉を通さない。

コーヒインは仕方なく、吸血鬼にとって一番のご馳走であり、命の源ともいえる血を飲ませようとしたが、これは逆効果だった。
彼女は血を見た瞬間に痙攣を起こし倒れてしまったのだ。

ローズは混血のため血を命の源とせず、他のもので代用できることが不幸中の幸いだつた。
それでも心が壊れてしまい、ただの人形のようになってしまったローズの為にリウムは彼女と同じ年齢の少女を連れてきた。
それがリデル・クロウである。

リデルは“次元の森”で拾われた孤児であつた為、魔女達の長とも

言えるサラマンダー家のティアナに預けられた。

そしてティアナは自分の孫であるカルムとリウムに彼女の教育を任せた。

そのため彼女は魔女として育ち、その後リウムは彼女をローズの遊び相手、且つ護衛としてスピリット・ソーン家に送り込んだのだ。ローズはリデルとの交流を深めるにつれ感情を取り戻し、食事も血以外は喉を通るようになったが、ローズの表情から真の笑顔は消えてしまった。

そしてそのまま

*

「そういふことだったのね。」

「ええ。」

リウムはローズの問に対し頷いた。

「それと話が途中だつたわね。リデル、貴女も聞いていきなさい。」

部屋の外に待機していたコーフィンがローズの命によりリデルの分の椅子も持ってきた。

そしてリウムの計らいによりコーフィンも話を聞くこととなつた。

「“次元の森”の異変についてだつたわよね？」

ローズが頷くと、リウムは微笑して話を進めた。

「さつきローズにも言つたけど、その薬は効かないわ。」

ゴーフインが驚いた顔をする。

「“赤の蠍草”は強力な毒草よ。これと対になる薬草、つまり強力な解毒剤を作れる薬草は“月の靈草”しかないわ。でもね……」

リウムは下を向いた。

「でも、“月の靈草”はもう存在していないの……」

その言葉を聞いてローズは氣を失いかけた。

「強力な毒草に侵された貴女の祖父は死を待つしかないのよ。」リウムの言つた言葉をローズはそう受け止めてしまった。
いや、実際にリウムが言つた言葉にはその様な意味が含まれていたに違いない。

自然と目から涙が零れ落ちる。

そんなローズを見て、リウムは心を痛めた。

やつぱり内緒にしておいた方が…

そんな考えが頭を過ぎったが、すでに遅い。

言つてしまつたものは仕方がないと彼女は自分自身を納得させ、話を続けた。

「満月の晩にだけ咲く“月の靈草”、つまり今晩に咲いているはずなのよ。外は雨だけど、満月の予定日には必ず咲くの。でもね、一週間前に貴女のお祖父様が倒れてからは株ごと根こそぎ無くなっていたのよ。」

「そんなん！！」

ローズは悲鳴に近い声を上げた。

「そして “月の雲草”^{ルナドロップ・ハーブ}は ‘‘次元の森” にしか存在しない。つまりそれが無くなつたという事は魔女の ^{ルナドロップ・ハーブ}」

「魔女の誰かが関与しているって言いたいんでしょ？」

突然、其処に居ないはずの人物の声が聞こえた。
リウムとリデルが身構え、コーエィンがローズを庇つようローズの前に立つ。

「姉さん！！」

リウムはその人物に向つて悔しそうに歯噛みした。
ローズはコーエィンの肩越しに、その人物を見た。
すらりと背が高く、腰まである銀髪、その姿はリウムにそっくりだつたが、唯一つ瞳の色だけが違つていた。
彼女は微笑んでるのにも拘らず、その瞳は何処までも氷のように冷たかつた。

「お久しぶりね、リウム。これを探しているのでしょうか？知つていてよ。」

そう言つとリウムはポケットから薬草を取り出した。
それは紛れも無く “月の雲草”^{ルナドロップ・ハーブ} だった。

「姉さん、それを渡して！！」

「フフ、ただでは駄目よ。カオス様が悲しむもの。」

カルムの手の中で“月の雫草”は燃えて灰になってしまった。
それを見たローズはその場で泣き崩れた。

「目的は何？何を企んでいるの？」

「企む？失礼ね。私はローズ嬢に“月の雫草”的株を分けて差し上げようと思つて来ただけよ？」

ローズは会話の中に自分の名前が出てきた事に驚き、肩を震わせた。

「ただし、条件付でね。」

冷たい笑顔でカルムはニッコリと笑う。

「一人でカオス様の館に来ていただきたいのよ。そうすれば株を分けてあげるわ。祖父を、スピリット卿を助けたいのでしきう？さあ、いらっしゃい。」

そう言うとカルムは手を差し出した。

ローズはそんな彼女をじっと見詰める。

「本当に・・・本当に“月の雫草”をくれるの？本当に？」

そう言いながらローズは彼女に引き寄せられるように彼女に近づいていく。

「ええ、本当に。まあ……」

ローズが彼女の手をとつた

「ローズ、黙目……」

リウムの声もローズに『届く事は無かつた。』
彼女はすでにその場から消えていた。

『心配しなくともちゃんと返してあげるわ。うふふ…あせはせはせ…』

何処からともなくカルムの声が聞こえた。
リウムは強く拳を握り締めた。

外では一つの間にか雨が止み、満月が輝いていた……。

第一章～Herds・Disintegration～(H)

気が付いた時にはローズは見知らぬ部屋に居た。
その部屋には沢山の薬草が置いてあつたが、ローズの他に部屋には誰も居なかつた。

どれが“月の雲草”かしら?

彼女は一人、そんな事を考えていた。

自分の置かれている状況を冷静に把握せずに……

*

「ふふふ、本当に来たわよ、あの娘。」

「『』苦労だつたな、カルム。」

リウムの姉、カルムは首を横に振つた。

「いいえ、大した事無いわ。それより、本当に好きにて良いのかしら?」

「ふつ。」

玉座に座つたカオスは黒い笑みを浮かべた。

「いいだろ、じちらが不利にならなければ、な。」

「やべ、じゃあ行つてくるわ。」

そつとうとカルムはその部屋を後にした。

*

「ローズ様？」

カルムは恭しくローズの名を呼び、部屋の中に入つていった。

「え？ あつ、はい？」

ローズは薬草をいじつていて、突然は言つてきたカルムに驚いた様子だった。

それを見てカルムは微笑んだ。

「貴女と一度、ゆつくり話がしてみたかったの。其処に座つて。」

其処には薬草の中に隠れるよつとして、テーブルと椅子が置いてあつた。

「あつ、でも早く帰らないと監心配してるだろっし……」

「座つて。」

カルムの、言葉、にローズは一瞬意識が遠のき、そして気が付くと椅子に座っていた。

「紅茶とケーキがあるの。どうぞ召し上がり。」

そう言われ、ローズはテーブルの上に置いてある紅茶とケーキを一口ずつ口にした

「あの……どれが“月の雲草”でしょうか？見たことないから分からなくて……」

「ああ、それね。」

カルムは椅子から立ち上がると、数ある植木鉢の中から“月の雲草”ルナ・ド・ロップ・ハーブ25を摘み、ローズに渡した。

「あ、有難うござります。」

頭を何度も下げるローズを見詰め、カルムは妖艶に微笑んだ。

「ねえ……」

「はい？」

リウムの微笑を見て、戸惑うローズの耳元にカルムはそっと唇を近づけた。

「憎い？」

一言呴いてローズの顔をじっと見詰める。

「貴女のお祖父様をあんな風にした私達が…憎い？」

「な、何を言つて…」

「憎いんだしょ？…とつても、とつても……」

「あ…あ…ああ…」

ローズの瞳が激しく揺れ、焦点が定まらなくなる。

「ふふ、憎いのね。でも大丈夫よ。貴女の大好きな人たちは皆、あなたのそんな思いも、どんな姿も受け止めてくれるわ。それに」

カルムがローズの目の前に手を翳すかざと同時に、その瞳が閉じる。

「それに貴女は、もう憎しみしか感じなくなるんですもの。」

次の瞬間、ローズの瞳がカツと開いた。

その瞳は何時もの紅ではなく、よりいつそう紅く、毒々しく不気味に輝いていた。

*

「どうじょう…私のせいだわ……」

ローズとカルムが居なくなつた部屋で3人は狼狽^{うるた}えていた。

「せめて部屋に結界を張つておけば、こんな事には…」

「先生、自分を責めないで下さいよ。私にだつて責任はあるんですから。」

そんなリウムとリナルの様子をコーフィンは申し訳なさそうに見ていた。

「私が守ると約束いたしましたのに、これでは亡くなつた日那様や奥様に申し訳が…」

その時、部屋が眩い光に包まれた。

「あら？皆さんどうなさつたのかしら？」

その光が消えた時、そこにはカルムとローズが立つていた。
ローズは下を向いたまま動かない。

「ローズ！」

リウムはローズに駆け寄り、触れようとしたのだが

パシッ！

リウムの手はローズによつて弾かれた。

リウムの手には引っ搔かれたような傷跡がついている。

「ローズ？」

顔を上げたローズの目は毒々しく紅く光っていた。
そして爪は獸のように鋭く伸びている。

「うふふ。リウム、この子の事大何んでしょ？だつたら

ローズが手を振り上げる。

「こ」の子の憎しみも、ちゃんと受け止めてあげなきやね？アハハハ
ハハ！…！」

シユツ…！

ローズが手を振り下ろし、それをリウムは当たる寸前でかわす。
今までリウムが居たところにはローズの攻撃によつて出来た亀裂が
はしつていた。

「ふふ、何で逃げるのよ？受け止めなきや、ねえ？クスクスクス…」

カルムは楽しそうに笑つた

「くつ… ローズに何をしたの…？」

“地獄の炎”といつ薬は知つていて？

「そんなもの……」

「知らないわよね？だつて私のオリジナルですもの。」

艶かしい笑みを浮かべながらリウムはさらに続ける。

「その薬はね、心が弱くて脆い人ほど良く効くの。その人の奥底にある苦しみや怒り、憎しみなどの負の感情を具現化させ感情として表に出すの。そうするとね、」

ローズの目がさらに紅く光った。

「その人は自分の一番大切なものを壊したくなるの。うふふ、何故でしょうね。もちろん体や心は負の感情に支配されてしまうなんていう大きな変化についていけなくなるから自我を失い自分自身が制御できなくなるわ。」

ローズの爪がリウムの頬を掠め、その手から放たれた衝撃波がリデルとコーフィンを襲う。

しかし一人はそれをギリギリのところでかわした。

そんな一人を見てカルムが露骨に嫌な顔をする。

「何だ、当たらなかつたの。つまんないわ。リデルの教育なんですねんじやなかつた。結局私の邪魔になつただけじゃない。」

「私も好きで貴女なんかに育てられた訳じゃないわ！－！」

たまらずリデルも憎まれ口を叩く。

「ふん、まあいいわ。しかしあれね。いくら人間との混血と言つても人間からは程遠い存在ね。人間から見たら化け物かしらね？」

一人でクスクスと楽しそうに笑うカルムの前にリウムが迫った。

「姉さん、いい加減にし……くあつ！…」

その背中をローズの鋭い爪が襲った。

ザシュツ

鈍い音がして鮮血が散る。

「くつ……あつ……」

「いい顔ね、リウム。次もちゃんと受け止めてあげてね。貴女が死んだら、この子も逝くから。」

*

ローズはぼんやりと自分の意識の中を漂っていた。

目の前で大好きな人達が血を流し倒れしていくのが見えた。
大好きな人たちを傷つけているのは……そう、自分自身である。
しかしローズにはどうする事も出来なかつた。
もう一人の自分の力はあまりにも強大過ぎて止めるのは不可能だつた。

ローズは涙を流した。

哀しい……どうすることも出来ないなんて……

その気持ちを吸い上げるようにして、もう一人の自分は力を増していく。

ローズはどうする事も出来ず、流されるまま流され続けた。

ドクン、ドクン

何処かで心臓の音がする。
聞いていると安心できる音。

ローズは最初それが自分の心臓の音かと思っていたが、それは違つていた。

自分の心臓はその音と共に一つと鼓動している。

「の音は……？」

今度は後ろから優しく抱きしめられる感触が。
その温もりはローズにとってとても心地よいものだった。

『ローズ…ローズ…』

何処からか自分を呼ぶ声が聞こえる。
ずっと昔に失ってしまったこの声は

「お母さん…？」

それは紛れも無く母の声だった。

『ローズ、悲しみに飲み込まれてはいけません。』

「え？？」

『見えてくるのでしょうか…もう一人の貴女が…』

ローズは何も言えなかつた。

はつきりと見えている凶暴な自分も自分といつ存在の一部だと認めたくはなかつた。

『アレは貴女なの。アレを作り出したのは貴女、でもアレを消せるのも…ローズ、貴女だけなのよ。』

母の言葉はある凶暴な自分も自分の一部だと認めさせたのだった。
その言葉がローズの心にぐさりと刺さる。

けれどそれは本当のことであり、逃げてばかりはいられない。

『いいの？大好きな人たちが苦しんでも？』

嫌だ、そんなの嫌！！

『いくら吸血鬼や魔女と言つても“死”といつものは訪れるのよ？』

嫌、嫌！誰にも死んでほしくない！！

『このままでは貴女の好きな人たちちは』

嫌だ、いやだ、イヤだ…

「嫌だ――――！」

*

「くつ…ね、姉さん…」

「リウム先生…！」

膝をつくりウムの姿を見て、リデルは慌てて駆け寄ろうとした、が

リデルの前にゆらりとローズが立ちはだかり片手を挙げた。
あまりに突然のことでのす術もなく覚悟するリデルを見下ろし、ローズの鋭い爪がリデルを襲う。

かに見えた。

コツ、コツ

だが、その手は途中で止まり、振り下ろされた事はなかった。

「ローズ？」

「うう……あ……いやああああああ……」

ローズの紅い瞳の毒々しい輝きは失われ、いつもの紅い瞳に戻った。そしてそのまま意識を失つてしまつたローズの体を支え、リデルはその場にしゃがみカルムを睨みつけた。

「あら、おかしいわね？ 効き目が切れるなんて失敗だつたわ。」

カルムは冷たい眼差しでローズを一瞥した。まるで実験体を見るような目で。

「興醒めね。今日は帰させてもらうわ。命拾いをしたわね、リデルもリウムも。フフ、また一緒に遊びましょうね？」

そういうなりカルムは青白い炎に包まれて消えた。部屋の中は何事もなかつたかのように静まり返つた。

ただ、ローズの爪で壊れたモノ達以外は……。

壊れた家具、引き裂かれたカーテン、輝の入つた床や壁、そして傷つき苦しむヒト達。

それだけでも先の惨劇の生々しさを語るには十分だった。憎むべき敵は此処に居らず、此処に居るのは全員が被害者、その事実さえも皆を悲しみに浸らせる要素の一つだった。

「あの子は、目が覚めたら自分を責めるのでしょうかね。」

血の味がする口で、リウムはポソリと呟いた。

*

「そうか、失敗したか。」

「ええ、『めんなさいね。ちょっと欲張りすぎたみたいだわ。』

蠅燭の細い光が照らす部屋でカオス卿とカルムはグラスを傾けて話していた。

グラスの中身は人間の血。

一番近くにある人里から人間を狩り、血を採ったものがこれである。それを2人はまるで高価なワインでも口にするかのように美味しそうに飲み、話を続けた。

「確かに欲張りすぎだな。そんなに上手く事が進む筈は無い。しかし、まだ時間はある。いずれ機会は巡ってくるだろう。」

そうね、とカルムは短く笑つた。

「そういえば…」

カルムから視線を逸らし窓の外を見ながらカオスは呟いた。

「不死の一族について何か知らないか?」

カオスの間にカルムの表情が変わった。

「永遠の命を持ち、どの種族よりも優れた魔力を持つ。魔女にとつ

ては神と等しき存在で、崇められ、また畏れられる。その心臓は、ただ人が食しても永遠の命を与える効果をもつ。でもあの種族の生き残りは一人しか居ない筈ですから滅んだも同然ですわ。何故その様な事を？」

「生き残りとはあの谷に住んでいる魔女の姫君のことか？」

「ええ。‘鎮じゆされた谷’の薔薇庭に住む大魔女、確か名前は… オフィーリアだつたかしら？」

わざとらしく首をかしげて答えるカルムを一警し、カオスは部屋を後にした。

「その心臓、是非欲しいものだな」

そんな事を呟きながら。

*

「ふう。」

あの一件の後、カオス卿の館にある自分の部屋に戻ったルアはベッドに仰向けに寝そべり、溜息をついた。

約1年間にわたるスピリット＝ソーン家への潜入。その任務からようやく解放された。

それでもルアの表情は曇っていた。

その原因は2つある。

第一に、エドワード・スピリット＝ソーンの暗殺は失敗し、ローズ・スピリット＝ソーン、リウム・サラマンダーも仕留めそこない、つまり任務は失敗であつたといえるからだ。

そして第二の原因是

「こんなに失敗していたら、お義父様に嫌われてしまつわね。」

義父とはカオス卿の事である。

生まれてすぐに、両親を亡くしたルアはカルムに保護され、その後カオスの養子として迎えられた。

実はルアという名前はカオス卿が付けたものである。

物心つく前からルアと呼ばれていたために彼女自身も本当の両親から貰つた名前を知らない。

しかしルアにとつて両親から貰つた名前など、どうでもいい事だった。

名前というものは個人を識別するための記号でしかない。

何より彼女は現在の義父から貰つたこの名前が気に入っていた。何故ならルアは義父に親子愛以上の感情を持つていたからである。そのため、カルムには複雑な感情を抱いていた。

「それにしても、この“禁断の果実”の効き目には驚いたわ。」

ルアはそう言うなり、自分の胸元に下がつてあるネックレスの宝石をつまみ上げ、目の前にかざした。

毒々しいまでの真紅の輝きを放つその塊は凝固した血液を連想させる。

“禁断の果実”^{プロウティファン・ベリー}、それはカルムの作り上げた魔力のこもった宝石である。この宝石は全ての魔力を無効化する力を持っている。すなわち、対魔術戦ではこれをつけている限り無敵といえよう。

ただし“禁断の果実”は実は未完成で、重大な欠点を持っている。ルア自信もカルムから「欠点がある」と告げられてはいるが。それが何なのかまでは聞かされていない。

「こんなに絶大な効力を發揮するといつのに何が欠点なのかしらねえ？」

*

「んつ……。」

ローズが目を覚ますと、そこはリデルの部屋だった。
氣を失う前の記憶が曖昧でよく思い出せない。

ポツリ、ポツリ

何が悲しいのか分からぬ、それでも涙が零れる。

止めなく溢れ零れ中々止まらない。

それでも心の奥底で大きな過ちを犯したのではないかという罪悪感に駆られていた。

ローズは自分が情けないとthought。

傷つかなければいけないのは自分なのに、いつも傷つくのは周りの人たち。いつも誰かに護られてばかりで、何もしてあげられない。こんな自分をどうして恥に思わずいられようか？

スピリット＝ソーン家の跡取りしての器も無に等しい。

‘無力’という言葉がローズを苛み、蝕み、罪悪感と化して彼女を涙の海に沈める。

ドクン、ドクン、ドクン

考え方のストレスからか動悸がした。

心臓の音… そういえば…

虚無という悪夢の中で母の声を聞いた気がした。いや、暖かいあの声は紛れもなく幼い日に聞いた母の声だつた。

ローズはハツとし自分のドレスのポケットを探つた。

チャリン

美しい金属音と共にポケットから出てきたのは鍵の形をした飾り気の無いペンダントだつた。

それを見てローズはホツと安堵した。それはローズの宝物であり母

の形見である。

『ローズ、これをあげるわ。大切なさー』

そう言つて母が自分の首にペンダントを掛けてくれたのは果たして何年前のことだろうか？

涙が、止まらない。

幸せだった日々を思い出すということは、今のローズにとって苦痛でしかなかつた。

幸せなんて、もう…私にはないから……

周囲の人々に迷惑をかけているといつに笑つてゐることなど出来ない。ましてや幸福を追求することなんて尚更だ。

もしかしたら自分は疫病神なのかもしれない。周囲の人々が不幸になるのは私のせい？

ローズの頭の中は負の感情が渦巻く。

どうすればいい？答えは簡単だ。

吸血鬼の牙、本来は血を吸う為にあるそれは血を吸わないローズには必要ない。だが手首の脈を貫くには十分すぎるほどだつた。

「みんな……ごめんね……」

バンッ!!

ローズの牙が自分の手首に食い込む寸前に部屋の扉が開き、それと同時に時が止まつた。

*

傷口から溢れる血は中々止まらなかつた。

自分の魔術が鈍っているわけでもない。回復の呪文が間違っているわけでもない。

「どうしたものかしら?」と咳き、リウムは苦笑した。

呪文が駄目なら唄に変えてみる。リウムの周りに優しい風が吹いた。それでやっと出血は止まつた。

「何でことじょうね。呪文ではなく唄を使う破目になるなんて。」

“唄”と名の付く魔法は“呪文”を何十倍にも強化したものであり、その効果は強力である。

本来ならこの程度の傷は呪文で十分なはずである、それも魔女の中で随一の魔法の使い手といわれるリウムの魔法である。効かないはずが無い。だが、効かないのだ。

リウムはそつと傷口に触れてみた。

そこには何故か魔力の断片が残つていた。

ローズは魔女との混血ではない。ローズの母は普通の人間だった。それだからこそ他の吸血鬼たちに軽蔑の眼差しでローズは見られているのだ。

リウムも何度もローズの母に会つてしているので間違いない。

それでも傷口に魔力の断片が残つてゐる。ただの人間が魔術を教えられるわけが無い。そしてスピリット＝ソーン家は吸血鬼の長を務め

るほどの家系だが、魔術に優れていると言う話は聞いた事が無い。まさか姉さんが？いや、それは有り得ない話だ。一回教えただけで魔術を行使できるものなんて魔女でもそうそう居ない。リウムでさえ蠟燭に火をつけるという簡単な魔法を習得するのに丸一日かかったのだから。

分からぬ。どうしてローズに魔力を帯びた攻撃が出来るのか全くわからない。

となると、本人に聞いてみるのが一番である。

昔のことは思い出せないだろうし、思い出したくないだろう。それでも、記憶の奥底を覗くことくらいは出来る筈だ。

思い立つたら、即行動……とこいつわけで、リウムは自室を出てローズの部屋に向った。

長い廊下を歩きながら頭の中を整理する。

まずは何から話そつか？どんな風に話を切り出そうか。

そもそもローズは目が覚めているはずだ。

目が覚めている…？まさか！

そうだ、私はなんて重大なことを見落としていたのだろう。目が覚めた彼女は何を思うだろう？自分の意思での状況を切り抜けたということは少なからず記憶が残っているに違いない。きっと彼女は自分を責めるだろう。そして、そして彼女は自分を傷つけずにはいられなくなる。命を絶とうとするかもしれない。そうなってしまう可能性のほうが高い。

嗚呼、私は何て馬鹿なのだろう。ローズの傍にずっとついているべきだったのに。

ドレスの裾を翻し、リウムは急いでローズの部屋に向った。

ローズ、どうか無事でいて。この嫌な予感がどうか外れますよう

に！

部屋の前に着くなり、リウムはその扉を乱暴に開け放った。

そこに見たのは悪い予感が現実へとなる直前の風景。ローズの吸血鬼としての牙が手首に勢い良く突き刺さりつつしている。

考える暇は無かつた。

リウムはローズに向つて人差し指を指す。

指先から田標に向かい、目には見えない魔力が放たれ、時が止まつた。

一切の呪文をカットする無詠唱の高速魔術。

もしも、リウムがこの魔術を使うことが出来なかつたら、手遅れになつていただろう。

リウムはそつとローズを抱きしめ、魔法を解いた。

ローズは何が起こつたのか分からぬといつ表情をしたが、すぐに全てを理解声を上げて泣きはじめた。

「どうして……ひくつ……どうして止めたの？ わ、私なんて……居たつて……ぐすつ……迷惑なだけだもん……」

泣きながら訴えるローズをギュッと抱きしめリウムも涙を流した。何でこの子は、こうも自分を責めてしまうのだろう。ただ混血だと、うだけで周りに軽蔑の眼差しで見られ、苦しんでいる。母も父も、あんな目に合い、祖父さえ危ういといつのに誰も手を差し伸べてくれない状況を彼女はどんな風に受け止めているのだろうか。守つてあげたいと思っていた。だけどそれは「思つていた」の範囲から出ていなかつたのもしれない。何もしてあげられていなかつ

たのだ。

彼女の苦しみも、悲しみも何も分かち合つことが出来ていなかつたのだ。

「リウム、泣いてるの？」

泣いているはずのローズがいつしかリウムを罵遣つていた。

「こんなにいい子なのに、何で、ビリして……」

普通の人間として生まれていればこんな目には合わなかつたのかも
しないのに。

それは今更願つてもビリにもならないことである。

悔しくともビリにも出来ない。

だから、今からでも何かローズにしてあげられることを考えよう。
少しでも彼女が以前の無邪氣な明るさを取り戻せるように。もう危
ない目には合わないようになら。

「ハハん、大丈夫よ？」

ローズにこれ以上心配をかけないように、二つも通つにリウムはそ
う言つた。

決して人前で涙を見せない、気丈な魔女リウムとして。

ローズの頬に伝う涙をハンカチでそつと拭いてやり、リウムはロー
ズの目を見てにっこりと微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9808c/>

吸血狩り～Vampires Hunting～
2010年11月14日14時36分発行